

「唐瓶子」考

——徒然草一〇三段の読み方——

櫻井靖久

はじめに

徒然草の一〇三段は、わずか数行に満たない章段ではあるが、様々の色々な問題をかかえている。まず最初に、橋純一氏の徒然草の執筆時期想定である、元徳二年の末から一年間に書かれたとする説の障害である「侍従大納言公明卿」の「大納言」の時期の問題である。そのために、誤字・誤記説や、書き直し説が生まれた。次に、この章段に見る「平家物語」の享受史の例としてである。また、謎々の解き方が不明であり、定説がない。更にその謎解きのいわゆる「心（説明・解説）」にあたる部分が伝本によって二種類出てくる。どちらが正しいのか、という問題もある。そしてそもそも、この章段は、事実、しかも歴史的事実を簡潔に伝えたものであるはずであるが、その意味がよくわからないのである。山極圭司氏の説明を引く。

沼波瓊音氏は、「唐瓶子」というものが「我々には耳遠く、どうも面白うは思はれぬ。しかしこの時は面白かったのでは

らう」（『徒然草講話』）と書かれ、安良岡康作氏は「特に深い意義を求むべき段とは思はれない」（『徒然草全注釈』）と述べられた。要するに、よくわからない、ということだろう。（中略）これは面白い話だろうか。楽しい話だろうか。いったい兼好は、どういうつもりで、この話を書き伝えたのだろうか。その肝心な所が明らかでない。

と述べている。

私はこの論で一〇三段の内容のみを追究する。藤原（三条）公明が「大納言」であるかは問わず、この後宇多院の時代（一三二八〜一三三二）に公明は参議（一三二九）になり、四位相当官であり、対する丹波忠守は典薬頭・宮内卿として同様の四位相当官にあり、拮抗してライバルともいえる存在であることを押さえておく。

そこで一〇三段を、適切かつ丁寧な注を付していると思われる、三木紀人氏の本文と訳を引用する。

（本文）大覚寺殿にて、近習の人ども、謎々を作りて解かれけるところへ、医師忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿、「わ

が朝の者とも見えぬ忠守かな」と謎々にせられにけるを、「唐瓶子」と解きて笑ひ合はれければ、腹立ちてまかり出でにけり。

(訳文) 大覚寺殿で、院のおそばに仕える人々が謎々を作つて解いているところに、医師の忠守が参上したところ、侍従大納言言公明卿が、「わが国の者とも思われぬ忠守よ」と彼を謎々に仕立てた。ある人が「唐瓶子」と解いて、みなで大笑いされたところ、忠守は立腹して退出してしまつた。

三木氏は後の語釈で「一座の爆笑」と注する。それ故、ここでは、「一座の爆笑」「忠守の立腹」「忠守の退出」を押さえておく。ちなみに、侍従公明は藤原(三条・西園寺)氏で、「侍従」は天皇に近侍し拾遺補闕を任とする。勅撰集に十二首入集。忠守は、阿知使主を祖とする帰化人の子孫で丹波氏、勅撰集十一首入集。

唐瓶子説の説明

三木氏が「一座の爆笑」とする謎々を確認する。典葉頭・宮内卿である(丹波)忠守を見て、侍従公明は謎々をかける。

「わが朝の者とも見えぬ忠守かな(わが国の者とも思われぬ忠守よ)」その答え(解・解き方・心)は「唐瓶子」である、という。「唐瓶子」そのものは「金属で作つた瓶子。中国風のとつくり」「金属で作つた、酒を入れて注ぐ器で、後世の徳利の如き物」「唐瓶子とは金にてこしらへたる瓶子なり。又は木にて作り、黒ぬりにしたるもあり。かねはこしらへ唐めきたる故、唐瓶子と云ふなるべし」とある。要は、金属製の中国の徳利、もしくは

は木製で黒ぬりにしたものとイメージが定まる。それでは、この金徳利(あるいは黒徳利)がどうしておかしいのかというと、よくわからない。

「同じ「ただもり」でも、平忠盛は『伊勢へいじはすがめなりけり』とはやされたが、こちらの忠守は『平氏ならぬ唐瓶子だと解いたもの』」

「平家物語を念頭において、『忠盛』の『伊勢平氏』に対して、忠守は『唐瓶子(平氏)』と解いたのである」

「平家物語で、平忠盛を出生地に寄せて、『伊勢平氏はすがめなりけり』とはやしたこと、忠守が唐からの帰化人の子孫であることをもじっている」

現行の注釈を見ても大同小異であり、結局同じことを説明している。そして改めて原文に戻つて考えると、「唐瓶子」の原義はわかつた、解き方も「平家物語」を典拠とすることも理解した。しかしここで改めて思うことであるが、解き方を聞いた瞬間に爆笑する内容であろうか。せいぜい典拠の「平家物語」を思い返して、「なるほど」と含み笑う程度ではなからうか。

ここは近世の風呂屋や床屋ではない。院の御前であり近習たちである。その人々が爆笑する根拠として「唐瓶子」唐平氏説は弱いと考える。

これに対して、流布本の「烏丸本」ではなく、「常縁本」を取る立場がある。西尾実氏は旧日本古典文学大系で「唐瓶子」とするけれども、岩波文庫の「新訂徒然草(安良岡康作が加わる)」では、次のように述べる。

常縁本によれば、「唐医師」となり、忠守が帰化人の子孫で

ありながら、歌人、『源氏物語』の注釈家でもある、和漢にわたる二面性を認めて、「あなたは、ほんとうは、唐の医師ではないのですか」という意志をこめてからかつたとすれば、「唐医師」こそ最も自然な解き方と考えられる。よつて底本の本文を「唐医師」と改めた。

とする。更に『全注釈』では、

これに比べると、常縁本の「からいし」即ち「唐医師」は、『平家物語』に拠る必要なく、はるかに自然な解と言えよう。わが国の者とも見えぬ医師忠守なのだから、「唐医師」と解いたのである。

「爆笑」の問題をにおいて、謎々の解を求めるならば、最も素直な方向といえるだろう。

ちなみに、「徒然草」に解かれる謎々の章段は他に二つある。一つは六二段の延政門院の「ふたつもじ」の歌であり「こひしく」と解いている。更にもう一つは二三五段の「うまのきつ……」という難解とされる謎々の章段であり、注釈書によると「雁」と解くとする。

鈴木棠三は徒然草の謎についてこう述べる。

『徒然草』に現れる謎は、平安朝の謎々物語とは、構成技法の上で、革命的な変化を示している。それは、

馬のきつりやうきつにのをかなかくほれいりぐれんどう
というもので、(中略)右の謎の構造は、「馬退きつ」「中凹
れ」「入り」「ぐれんどう」によって、上部消去、中央部消去、
挿入、倒置を指示したもので、平安朝の謎の構成にはまったく見られない手法であった¹⁾。

この文を引用したのは、ここでそれらの手法が使われているというわけではない。徒然草の時代は謎々の変革期であり、どんな形態の謎々もありえたであろうという可能性を示したものである。

さて常縁本に戻る。村井順氏は、「兼好自筆の祖本に、もつとも近いものが常縁本であらう」とし、「常縁本が流布本に先行していたもの」とし、この一〇三段がその最たるものとしている。

典薬頭忠守は、丹波氏で、祖先は帰化人である。だから、公明が「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」となぞなぞにしたのである。したがって、「唐医師」と解いたのは正解である。

ところが、流布本は「唐瓶子」となっている。忠守は丹波氏で平氏ではないから、これでは解答になつていない。徒然草には、古来何千・何万という読者があつたのに、この「からいし」という解答に疑問を抱いた者がなかつたのは、何といふなさない読み方をして来たのだろう。ここなどは、流布本がまつかなにせ物であることを、もつとも良く表わしている所である²⁾。

「一座の爆笑」という効果はこれでも届かないと考える。しかし、ここまで力説されているならば、常縁本の原文の検討が必要となる。常縁本の原文を掲げる。

大覚寺殿にて、近習の人々ども、なぞくを作りて解かれける所へ、³⁾醫師忠守参りたりけるを、侍従の大納言公明卿「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」と、なぞく⁴⁾にせられけり。「唐医師」と解きて笑ひ合ひければ、腹立ちてまかり出でにけり。

烏丸本との違い、校異は四ヶ所である。(常縁本)人々ども——(烏丸本)人ども、参りたりけるを——参りたりけるに、せられけり——せられけるを、唐医師——唐瓶子。前の二つは、特に解釈上の問題はない。後の二つが問題となるであろう。まず大きな問題は「医師と瓶子」である。そして次には、切れ続きの問題である。一度文を切るのと、助詞でつなぐのは何か意味があるのか、ということである。

それ以上に、そもそも何故爆笑したのか、という問題がある。この文章のどこかに、ひねりと奥が隠されているのではないか。

我々は徒然草を読む時に、人間心理のおもしろさや機知とエスプリ、話のうまさとの探求心を感じる。例えば、九二段の初心の矢二つ、一〇九段の高名の本のほりには人間の心理のおもしろさを、八九段の猫またには話のおもしろさとオチを、四五段の良覚僧正と四六段の強盗法印は名付けのおもしろさを、二〇九段の田を刈る人にはへリクツを、一八八段のますほの薄や、二四三段の八つになりし年には知の探求心を感じるであろう。

それらのことを考え合わせるならば、一つ一つの章段は作者により十分に考えられて、練られたものであり、決して単なる思いつきや、つまらない事実の羅列をするものではないと、私は確信する。

「唐医師」の謎とき

常縁本の謎々では、「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」であり、その答えが「唐医師」である。「我が朝の者(＝日本人)とも見

えぬ忠守かな」即ち「忠守は日本人には見えない」と言っているのである。それに対する答えが「唐(＝中国)医師」という。「日本人に見えない忠守」が、「中国人医者」でどうして「爆笑」が起ころのか。恐らく忠守の正式の職名である医師にはからかいの要素がない。「唐」が問題というか、注目の焦点なのである。

更に、次に重要なのは見た目なのである。つまり、謎々を耳で聞いて頭で理解するのではない。即ち、ある作品の文章を思い出したという知的理解による笑いではない。忠守を見て、公明の言葉聞いて、その言い合わせの妙に感心し、同意し、共感して爆笑したという即自的な笑いなのである。そういうものを忠守は持っていた、備えていた、体現していたのではないだろうか。そうでなければ、「笑い合はれけり(爆笑した)」という表現や解釈は生まれまいであろう。

木藤氏が「忠守の顔つきがとつくりのようであったかも知れない」と言い、小泉弘氏が「色浅黒く背の低い肥満体の(中略)マルデ唐瓶子ソックリ」と言い、三木氏が「異国的風貌」と言っているように。しかし、これらはあくまで想像であり、その根拠はない。

私は兼好自身は必ずヒントを残しており、それによって理解されるはずという思いをもって書いていた、と考える。「唐」という言葉に関して、その言葉を求めるなら、私は一二五段がそれに当たると考える。一二五段の前半を掲げる。

人におかれて四十九日の仏事に、或る聖を請じ侍りしに、説法いみじくして、みな人涙をながしけり。導師帰りて後、聴聞の人ども、「いつよりも、ことにけふは尊く侍りつる」

と感じあへりし返事に、或る者のいはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなむうへは」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。ある導師（僧）があまりにも「唐の狗（＝狛犬）」に似ているというのである。

繰り返して謎々をまとめて見れば、忠守に対して「唐医師」とは何か、忠守は帰化人の子孫であり、典葉頭であるから、事実その通りなので、からかいの要素もなければ、おもしろみも何ともない事実である。事実そのものに思われることが、謎解きとされるには、そしてこれがその時の状況そのものであるならば、ここに表わされる文字ことば以外の要素がある筈である。

また、事実以外に何も説明を加えていないのは、この場面について直接その謎解きをするには問題があるか、差別や侮辱的表現であるので、名士の名をあげての説明は差し控えたのではなからうか。この徒然草の中にそのヒントがあるので、わかる人にはわかると後世に残したのではないかと私は考える。

そうして改めて全体を見渡せば、一二五段の「唐の狗」が出て来る。

典葉頭である丹波忠守の顔姿がどんなであったかは残されていないし、記されても、描かれてもいない。しかし、増鏡の作者に擬せられ、源氏学者であり、勅撰集入集の歌人で、典葉頭・宮内卿である丹波忠守が、唐狗（狛犬）によく似た（そっくりの）魁偉な容貌、ありていと言えば醜貌（醜い顔）をしていたならば、この一〇三段の状況にピタリとあてはまるのではないかと。しかもその容貌は一二五段の例に見るように、ひどく珍しい例ではない。

一方の狛犬はどうか。徒然草の二三六段の聖海上人のうしろぎまの獅子こまいぬの例があり、神社の狛犬が普通に見られただけでなく、宮中においても馴染みのものである。門扉や障子絵に、また几帳や屏風などの鎮子（おもし）としてありふれたものである。枕草子や栄華物語の中にも、宮中で普通に見られることが描かれている。

謎々をこのことにより考えてみると、「本朝の者とも見えぬ忠守かな」の謎解きに、「医師」はともかく、「唐」という言葉の音を伸ばしたか強めたかして、アクセントを加えたのではなからうか。「唐犬」といえば直接表現として忠守を面罵することになるので、院の近習の間においては、そのような下品な直接表現ができるはずも、許されるはずもない。この高級な談笑の場においては、上品にくすぐり、強くあてこすることが求められたものであろう。しかし、そのことの意味が確かに伝わるように「かーらー（唐）」と伸ばして気を持たせて、「いぬ」と下げずに「いし（医師）」ときちんと常識の中におさめたのではなからうか。

そうすれば、近習が「なるほど」と「笑ひ合はれた（爆笑した）」というのも理解できる。忠守の方も「唐犬」と言われたら、水戸黄門のドラマではないが、「公明よ、御前ではないか、人を唐犬に例えるのは無礼であらうか」という程度の反論は言えたかも知れないが、「唐医師」というのでは、正しくその通りで反論もできない。それでも、満座の中で明らかに忠守一人が笑いにされたので、怒りはわいてくる。どうにも答えようもなく、反論できない。自身の中でくすぶり、怒りが高まり、あとはその場を退出するのみである。そうするならば、残りのキーワードである

「忠守の怒り」「忠守の退出」が理解できて、全体にふにおちる。そして、ここに問題になるのが、第二の校異の部分である。「常縁本」では、「侍従の大納言公明卿、『我が朝の者とも見えぬ忠守かな』と、なぞ／＼にせられけり。『唐医師』と解きて笑ひ合はれければ」とあるので、公明が謎を出して、その答えをやはり公明が解いたと読み取れる。

しかし、烏丸本では「／＼なぞなぞにせられけるを、『からへいじ』と解きて」となるので、公明が出した謎を、他の近習が解いたとしか読み取れないようになっていいる。事実さちんと本文を解積している三木訳や『全注釈』はそのようになっていいる。

これでは、忠守に対する公明の皮肉とからかいが薄れてしまうのではないか。私自身はその内容には賛成しないが、小泉弘氏のくだけた訳も、「常縁本」の文章を取り、忠守に対する公明の皮肉とからかいが、謎々の問いかけと答えの解説を一続きのものとしていいる。

忠守の顔が悪相であると仮定して、「本朝の者とは見えない」と謎かけて「唐犬」ではなくて「唐医師」とする差別と侮辱のすれすれであるさわとい謎解きであると考えれば、しかも肩透かしを与えるものであると考えれば、公明が謎解きする方が内容的にすぐれている文章である。また、そのサスペンス（宙ぶらりんの状態）を保つ上でも、文章を一度句切った方がたまたみかける文章となる。接続助詞の「を」でつなげると、場面がダラダラッと流れてしまうように、私には思える。

文章効果としても、公明と忠守の対立・対抗というか、ライバル意識の現れが鮮明になる。笑い声のみであるその他の近習（そ

の中に兼好がいたのか）が一人口を出して現れるというよりも、公明と忠守が正対して、物を言うほうが舞台効果としても、場面としてもスッキリしていると考える。

「唐医師」から「唐瓶子」へ

それでは、文意と場面がよく通じていいる「唐医師」の本文が「唐瓶子」となって、何故通用し、流布したのであろうか。結論から言えば、兼好自身が書き変えたのであり、本来の場面と意図を隠してしまった。少なくとも表面の意味をあえて誤解するように意図して書き変えた、と言えるであろう。何故、わざわざ兼好がそうするのか、そうする必要があろうか、という疑問が生まれてくる。

この作意については、単に「唐医師」と「唐瓶子」の問題だけでなく、章段の入れ変えにも関わる。同時に常縁本と烏丸本の差にもなる。このことを主張する山極氏の説を引く。

常縁本では、公明に関する第一〇三段のあと十段めに資朝の記事がくる。烏丸光広本や正徹本では、はるかに離れて上巻と下巻とに別れている公明と資朝とが、常縁本ではすぐ近くにいいるのである。（中略）

この流布本と常縁本との違いは、なぜ生じたのだろうか。（中略）
資朝について書いた時の兼好の思いは、公明について書き、明雲座主について書いた思いと一貫して共通するものがあつたのではないか。

兼好は、情勢を判断すること、あるいは事の成行きを予想したり、予言したりすることに特別な興味と自信を持つていた人物である。(中略)

もしそのころ兼好周辺の人が、常縁本徒然草を読んだとしたら、その抑えた表現の中から兼好の予言(引用者注 後醍醐帝を中心とする倒幕派の失敗)を明らかに読みとつたはずである。公明、明雲座主、資朝の三者を結ぶ筆者の思いを了解し、共感したはずである。そして、だからこそ兼好は、やがて自ら手を加えて、文章の配列を変えなければならなかったのではないだろうか。(中略)

さて、こういう配列変えを、作者以外の人がするだろうか。やはり兼好自身が、ある時思い立って章段の配列を変え、それが流布本の原本になったと考えるべきであろう。

そして、私はこの山極氏の兼好自身による章段入れ変え説に賛成する。山極説を導入することにより、一〇三段の流れが説明できるからである。

「唐医師」と書かれた本来の事実の持つ意味を変える。例えば、それが兼好自身のことではなく、丹波忠守に対する三条公明のからかい、皮肉と侮辱であるにしても、文字として、典拠頭であり宮内卿を直接に唐犬(狛犬)呼ばわりすることは避けるべきであり、慎しむべきことであろう。たとえ、直接見聞きしたとしても、家の日記として記録する家柄・家格の家であるならともかく、一介の出家僧・隠者の身にしては分の過ぎたことであろう。兼好自身の記録として、他人に読まれることを意識し、期待する身にあつてはなおさらであろう。

書き変える時に、兼好の頭にひらめいたもの、持っている知識の中で代用できる物が平家物語であろう。この一〇三段は、平家物語享受史の一コマとして注目されるが、話は逆ではなからうか。徒然草の二二六段の平家物語作製秘話に通じている兼好であるならば、平家物語の内容にはよく理解していたはずである。それ故、平忠盛と丹波忠守のタタモリを結びつけたのではないか。言葉のかけ方が皮相的で強引で、おもしろさが極端にへる言い替えであるけれども、くすぐり程度の笑いになる。肝腎なのは、謎々のおもしろさではなく、文章による禍、責任追及から逃れることである。「唐医師」の場合のような爆笑にはならないけれども、「唐瓶子」でも、謎々の笑いは引き出せる。しかも、最小の二字の入れ変え、平仮名ならば一字を加えるだけである。

更にもう一箇所手を加える。これが「公明卿(中略)なぞく」にせられけり」である。これを「なぞく」にせられけるを」と続けることにより、公明卿が謎々を出して解いたことを、公明卿は謎々を出しただけとした。謎々を解いたのは、誰かわからないが近習の一人とぼかしたのである。このことも兼好自身のことでも、責任でもないけれども、効果としては公明卿の弁説とその姿勢を柔らげたものになる。もつといえは、話の毒を柔らげた効果はあるだろう。即ち公明の謎々の問いかけだけの意地悪さにとどまってしまう。

ただし、この箇所には問題もある。岩波の新しい日本文学大系本にとられる本文の底本は、「現在最古の写本である永享三年正徹写本を用いた」とあり、その本文に「なぞく」にせられけり」とある。続く語句は「唐瓶子」である。この本文は「常縁本」「烏丸

本」と校合したとあるが、その校異は「けり——にけるを(鳥)」とあるのみで、常縁本の「けり」も「唐医師」も注記されていない。一〇三段については、他に「忠守参りたるを」の「を」が「を——に(鳥)」と注記するのみで、「人ども」についてはふれていない。この場合、常縁本の「唐医師」にふれもせず、注記もないというのはどうであろう。一方で先に見た「新訂本岩波文庫」は底本を烏丸本にしていながら、わざわざ本文を「唐医師」に改めている。それを考えるならば、杜撰であり、利用者に不親切なのではないか。

それはともかく、正徹本は常縁本と烏丸本の中間形態となっていることを特記しておく。

兼好による改訂版について

作者が一度書いた作品集を、内容を変えずに(あるいは最小の手入れで)、作品の順序を入れ変えることがありえるのか、そのような作品が他にあるのかどうかは知らない。

私は私自身で、徒然草一〇三段の内容を検討してつきつめて見ると、その結果として、作者兼好による「改訂版 徒然草」の論を認めざるを得ない結果となった。即ち初版の徒然草である「常縁本」と改版の「烏丸本」である。可能性としては「正徹本」がその中間形態にあたるのかもしれない。

これは頑くなく違うというよりも、そう考えた方が、一筋縄に行かない兼好の性質・行動がかえって鮮やかに浮かんでくるような気がする。もともと宗教者あるいは聖人としての兼好ではなく、

乱世の知識人として、来世・未来を先んじて理解し、見通して、自分の難を避けようと心がける兼好の方が、徒然草の作者として、よりふさわしいように私には思われる。

注

- (1) 山極圭司「徒然草の党派性」『文学』岩波書店一九八六年六月号一八頁
- (2) 三木紀人「徒然草(二) 全四卷」講談社学術文庫一九八二年二四九頁
- (3) 木藤才蔵「新潮日本古典集成徒然草」昭和五二年三一—九頁
- (4) 西尾実・安良岡康作「新訂徒然草ワイド版岩波文庫」一九九一年
- (5) 安良岡康作「徒然草全注釈上巻」昭和四二年角川書店
- (6) 三谷栄一・峯村文人「徒然草解釋大成」昭和四一年岩崎書店
- (7) 注2
- (8) 注3
- (9) 西尾実『日本古典文学大系方丈記徒然草』昭和三二年岩波書店一七一頁
- (10) 注9
- (11) 鈴木棠三『中世なぞなぞ集』一九八五年岩波文庫四四四頁
- (12) 村井順「徒然草の諸本」『国文学解釈と鑑賞』至文堂一九七〇・三、四三—三三号
- (13) 福田秀一・桑原博史『常縁本徒然草』昭和四二年大修館書店

(14) 注3

(15) 小泉弘「徒然草の鑑賞（第一〇一段）第二一〇段」『徒然草講座第二卷』一九七四年有精堂二〇七頁

(16) 注2

(17) 注2

(18) 注5

(19) 注15

(20) 注1

(21) 久保田淳『新日本古典文学大系方丈記徒然草』一九八九年

岩波書店

(さくらいやすひさ 元神奈川県立高等学校校長)